

近代日本における古戦場の観光資源化に関する 一考察

高山 陽子

An Analysis of Old Battlefields as Tourist Resources in Japan

Yoko TAKAYAMA

はしがき

多くの古戦場は、神社仏閣や宮殿などの記念建造物のある空間と異なり、本来は何もない空間である。古戦場は、戦後、死者を弔うために塚や碑が設置され、そのまま長い間、特に大きな変化もなく古戦場として存在し続けるが、何かのきっかけで劇的な歴史の舞台として観光資源化されることがある。その一例が、幕末から明治にかけて「聖蹟」となった南朝史蹟である。慰霊のための碑から顕彰のための記念碑に代わり、楠木正成や新田義貞などの南朝の武将は湊川神社や藤島神社といった別格官幣社に祀られた。この時期、交通網が整備され、南朝史蹟が観光目的地に組み込まれた。南朝史蹟は、日露戦争や日中戦争など進行形の戦争と結びつけられ、さらに、1911年に南朝正統論が政府によって定められると、皇国史観を具体的に裏付けるものとなった。こうしたイデオロギーに基づく戦場観光は1930年代半ばにピークを迎えるが、皇国史観がタブー視された戦後は南朝史蹟への観光は急激に衰退した。

神社や記念碑は古戦場に意味を持たせる。これらは、戦争がかつてここで繰り広げられたというリアリティや、感情を大きく揺さぶるような体験を人々に与えることがある。こうした感情的な体験とナショナリズムの結びつきについて、林志弦（2022）は「犠牲者意識ナショナリズム」という言葉で説明し、Lloyd（2022）は国家のための犠牲者と自らを感情的に重ね合わせる人々がいると主張する。本稿では、湊川神社や藤島神社などの南朝史蹟を事例として、日本の古戦場の観光資源化において感情とナショナリズムがどのように結びついていったかを明らかにする¹。

第1節 ダークツーリズムにおける語りの重要性

近代的な戦場への観光は慰霊の旅として始まった²。戦場に慰霊碑が建立され、遺族が死者を追悼するために訪れるようになった。第一次世界大戦後、記念碑は死者を個人として追悼する宗教的なものと、近代国家が戦争による犠牲が不可欠であることを主張する顕彰碑の間を揺れ動いていた。前者は、文字を刻んだだけの簡素な大理石の記念碑であり、後者は19世紀までの西洋の伝統的な英雄像の形をしていた。記念碑は集積する特徴を持つため、多くの犠牲者を出した戦場には複数の記念碑が建立され、訪問者は自分の目的に合致した記念碑を目指した。第一次世界大戦を契機に交通網が整備されると、国境を越えて戦場を訪れる人が増えていった。

戦場を訪れる観光は、ダークツーリズムの一つとされる。ダークツーリズムは、2001年、Lennon and Foley（2001）によって人間の死や悲劇にまつわる場所への訪問という意味で使われてから、観光研究における一分野となった³。かつて、ワートルローやゲティスバーグなどへの観光は死の観光（Thanatourism）や戦場観光（Battlefield tourism）と呼ばれる。ワートルローは近代的な戦場観光の典型例である。1815年のワートルローの戦い後、1820年代にライオンの記念碑が決戦地に設置され、その周辺に土産物屋や飲食店が次々に開店した。1850年代にはブリュッセルからの日帰り馬車ツアーが開催され、退役軍人による解説も好評を博した。19世紀後半のイギリスではワートルローの戦いについて記した書籍が大量に刊行されたように、ワートルローは特別な意味を持つようになる。「ワートルローの地は瞬く間に、国家が積極的に主導する帝国主義の文脈において模範的な哀愁およびナショナリスティックな勝利史上主義の聖

¹ 本稿では特殊な場合を除き、旧漢字は新漢字に改め、年号は原則として西暦を用いる。

² Lloyd（1998）

³ 井出（2018）

堂 (shrine) となった」⁴ という。ダークツーリズム研究ではホロコーストの研究蓄積はとりわけ多いが⁵、ゲティスバーグやサムター要塞、イープルやソンム、ガリポリなど、近代国家建設の過程で国家的な聖地となった戦場の研究も目立つ⁶。オーストラリアおよびニュージーランドからの観光客にとって、ガリポリは多くの犠牲者を出したという悲劇の場所であるだけでなく、初めて国際的な舞台で彼らの祖先が ANZAC (Australian and New Zealand Army Corps) として戦った栄誉ある場所であるゆえに欧米研究者の関心を集めるのである。

歴史的な重要性だけがダークツーリズム流行の理由ではない。近代社会では都市への人口集中による土地不足と衛生面の管理から墓を郊外に設置してきた。また、病院で最期を迎える人が大部分を占めることによって、日常生活から死が排除されていった。生活空間における死の不在が死を理解したいという欲求を生み出し、死と関わりのある場所へ人々を誘うようになった⁷。とりわけ近年では感情的 (emotional) という言葉からその訪問動機が説明される。Piekarz (2007) は、戦場とはこの国に所属している「我々」と敵側の「彼ら」を意識できる感情的な場所であると指摘する⁸。また、国共内戦の最前線となった金門島への観光を分析した Chen and Tsai (2021) は、中国人観光客と台湾人観光客の訪問動機を感情的なものだと説明する⁹。

センセーショナルな出来事が起こった場所ほど、多くの観光客をひきつけるゆえに、死や悲劇を観光資源とするダークツーリズムは常に娯楽か教育かという議論を起こしてきた¹⁰。悲劇とは直接、関係のない人々の中には、悲劇を学ぼうとする姿勢の人と、物見遊山的な人がいるが、観光地である以上、興味本位で悲劇の場所を訪れる人を排除することはできない。悲劇を観光資源とすることは、犠牲者を記念碑や博物館の設置に利用している¹¹という批判と隣り合わせなのである。

戦場のような空白の場所に設置された記念碑は、新たな景観と戦争の叙述を形成する。近代のメディアでは、その記念碑を訪れる人々の姿が映る。わずか数秒であっても、記念碑のある景観は神聖な場所であること、その場を自身が訪れたとすれば感情的な体験となることを確

約する場面である。特に現代社会では、映像が与える効果は大きく、映像に付随する語りは視聴者に直接、訴えかけてくる感情的なものとなる。戦場や監獄、被災地といった何もない空間を資源とするダークツーリズムでは、ガイドによる語りがかつさらに重要なのである¹²。

第2節 古戦場の神社化

日本では近代化の中でどのように古戦場が語られ、記念建造物が作られてきたのか。古くから日本では戦場に塚や供養塔が作られてきた。楠木正成の首塚としては大阪府河内長野市の観音寺、千早城址、大阪市東淀川区、羽曳野市の杜本神社、群馬県館林市の楠木神社にその存在が伝えられている。小楠公こと楠木正行の場合、往生院洞塚 (大阪府東大阪市)、正行寺 (京都府宇治市)、宝篋院首塚 (京都市右京区)、額田首塚 (東大阪市山手町)、飫島墓所 (鹿児島県薩摩川内市上飫町中飫) が確認されている。新田義貞の塚は、福井市の燈明寺畷の新田塚【図1】、福井県坂井市の洞塚、その他4カ所にある¹³。

長い間、ひっそりと立っていた南朝の武将を祀る祠や塚は、幕末の尊王攘夷派の志士たちによって史跡としての価値を見出された。「狐狸の巣窟」となっていた塚を何



図1 新田塚

⁴ Seaton (1999) p.151

⁵ 最近の研究では Dawson, O'Leary and O'Connor (2023) が挙げられる。

⁶ Seaton (1999), Slade (2003) など。

⁷ Brian and Buda (2018) p.814

⁸ Piekarz (2007) p.39

⁹ Chen and Tsai (2021) p.94

¹⁰ Sharpley and Stone (2009) など。

¹¹ Beech (2009) p.212

¹² Milles (2002)、Strange and Kempa (2003)、Ryan (2007)、Phuong M. NGO and Huong T. Bui (2019) など。

¹³ 室井 (2022) 142-176 ページ

とかなければならないという使命感が地元の有志に芽生え、湊川神社、藤島神社、阿部野神社、金崎宮、四条畷神社などの古戦場における神社創建へとつながった。こうした現象は特殊なものではなく、明治期には日本各地で郷土愛から地域の偉人を祀る慣習が広がり、尾山神社や松江神社のような藩祖を祀る神社創建が続いた。その背景には「旧藩士民の藩祖への遺徳追慕の心情」があったという¹⁴。記念碑の建立も同様であり、羽賀（1998）は、「人間の不幸の哀れみの感情、家と遺跡による“歴史”の確認、遺物がもつ呪術的な力への恐れ、こうした総体のなかに史蹟がある」といい、史蹟記念碑は人々に自身が立つ「歴史的な位置」を確認させる効果があると指摘する¹⁵。

南朝ゆかりの武将および皇子を祀る多様な塚や墓などの南朝史蹟の中で最初に神社として創建されたのは、護良親王を祀る鎌倉宮であった。明治天皇は護良親王に対して強い追慕の念を抱いており、即位前より親王を祀るための神座を設け祭儀を行っていた。1869年2月、護良親王終焉の地に神社を創建する勅令を出し、営繕司を設置し、岩尾助之丞に工事を指揮させた。3月11日には神仏混交を避けた簡素な地鎮式が執行され、6月14日に鎌倉宮と命名した。4か月の工事の後、社殿が完成し、7月21日に鎮座祭を行なった。7月23日を例祭日としたが暦制改正後は8月20日が例祭日となった。1873年4月16日の明治天皇の参拝後、6月9日に官幣中社に列せられる¹⁶。

1871年、「官社以下定額・神官職制等規則」（太政官布告第235号）によって、神道は「国家の宗祀」と位置付けられ、神社の格付けが進められた。天皇および皇族につながる神社は官幣社、一宮のような地域の有力な神社は国幣社となり、それぞれ大・中・小に分けられた。皇室縁でもなく、産土の神社でもない武将を祀る神社は別カテゴリーであったので、別格官幣社とされた。鎌倉宮、井伊谷宮、八代宮、金崎宮は官幣中社となり、後醍醐天皇を祀る吉野神宮は官幣大社となった。

楠木正成を祀る神戸の湊川神社は、最初の別格官幣社となった【図2】。1336年の湊川の戦いで戦死した楠木正成の墓に徳川光圀によって「嗚呼忠臣楠子之墓」（1692年）が建立されたことが、神社創建の由来である。吉田松陰は何度もこの地を訪れ、1865年、島津久光は楠木正成、護良親王、北畠親房その他の南朝の忠臣を合祀したいと朝廷に申し出る。さらに1867年、尾張名古屋藩主・徳川慶勝も朝廷に神社建立を奏上するが、実現しなかった。1868年、明治政府は楠木正成を祀る社殿を造営する

表1 南朝関連神社¹⁷

名称	創建年	祭神	場所	由来
鎌倉宮	1869	護良親王	神奈川県鎌倉市	幽閉地
菊池神社	1870	菊池武時・武重・武光	熊本県菊池市	城址
藤島神社	1870	新田義貞	福井県福井市	古戦場→城址
湊川神社	1872	楠木正成	兵庫県神戸市	古戦場 墓
井伊谷宮	1872	宗良親王	静岡県浜松市	墓
名和神社	1878※	名和長年	鳥取県西伯郡	邸宅跡
靈山神社	1881	北畠親房・顕家・顕信・守親	福島県伊達市	城址
阿部野神社	1882	北畠親房・顕家	大阪府大阪市	古戦場
小御門神社	1882	藤原師賢	千葉県成田市	墓
結城神社	1882※	結城宗弘	三重県津市	墓
八代宮	1884	懷良親王	熊本県八代市	城址
金崎宮	1890	尊良親王・恒良親王	福井県敦賀市	城址 古戦場
四条畷神社	1890	楠木正行	大阪府四条畷市	古戦場
吉野神宮	1892	後醍醐天皇	奈良県吉野郡	吉水神社より移築
北畠神社	1928※	北畠顕能・親房・顕家	三重県津市	城址

※別格官幣社に列せられた年 各神社社務所編の書籍およびウェブサイトより作成した



図2 湊川神社 大楠公御墓所入口

布達を發し、造営を兵庫県庁に委任、社殿建設を京都の宮大工・本城清右衛門とする大工棟梁に委ねた。1872年に着工し、1873年8月完成した。完成に先立って、1873年4月、別格官幣社に列せられた¹⁸。

¹⁷ 南朝関連の神社は1994年「建武中興十五社会」を結成し、現在では「建武中興十五社」と称しているが、それ以前は特に定まった総称があったわけではないので、ここでは南朝関係神社と記す。

¹⁴ 高野（2022）205ページ

¹⁵ 羽賀（1998）13ページ

¹⁶ 官幣中社鎌倉宮社務所編（1930）31-33ページ



図3 藤島神社

楠木正成と並んで「忠臣」として崇められた新田義貞を祀る福井の藤島神社は、移転を繰り返し、1901年に足羽山に社殿が建立された【図3】。湊川の戦いで負けた新田義貞は恒良親王・尊良親王を奉じて越前に向かい、金ヶ崎城に籠城するが、足利軍に攻められた尊良親王は自害し、恒良親王は捕虜となる。新田義貞は越前北部に逃げ、1338年、燈明寺で戦死する。この場所で、1656年に発見された兜が新田義貞のものだと判定され、福井藩四代藩主・松平光通が1660年、「暦応元年閏七月二日新田義貞戦死此所」という碑を建てる。それ以降、この地は新田塚と呼ばれる。1870年、福井藩知事・松平茂昭（1836-1890）が新田塚に祠を建て、翌年、新田義貞を祀る別格官幣社・藤島神社となる。神社周辺ではしばしば水害が起こっていたため、地元の有志による藤島義会が義捐金を募り、1881年、南牧野島（現、福井市文京）へ移築した¹⁹。しかし、この地も低地だったため、より南の足羽山に1901年、社殿が建設された。この遷座に対しては、藤島神社と福井市南端の人々が1896～97年の洪水を口実としたと牧野島の住民が批判したという²⁰。

「金ヶ崎の退き口」（1570年）で知られる金崎城址には、尊良親王を祀る金崎宮がある。1876年、教部省調査員が金崎城址を調査した際に、尊良親王自害の地とされる場所で経筒が発掘されるが、確証がないとして保留となった。1878年、片山政治郎（1848-1923）らの敦賀の有志の働きかけによって滋賀県令の籠手田安定（1840-1899）に撰文を依頼し、元敦賀県令の熊谷武五郎（1842-1902）による「金崎城趾碑」が建立された【図4】。建立の背景は「殉難将士の忠魂を奉慰する者なく歴史上著名の城址は徒に叢林繁茂し狐狸の巢窟となりて隠滅せんことを慨嘆し」²¹ たためとされる。藤島神社の建議や住民運動により



図4 金崎古戦場碑

官幣中社・金崎宮創建に至り、1890年12月に地鎮祭が挙行された。1892年、恒良親王を本宮に合祀する旨が下り、翌年5月に親王の鎮座式および奉告祭が行われた²²。

大阪の阿部野神社は、1878年より有志によって北畠顯家の霊を祀る神社の創建が進められてきた【図5】。1882年1月24日、政府は天下茶屋（現、大阪市西成区）に別格官幣社・阿部野神社を創建する旨を発するが、この地が低湿地だったため住吉村字藪山（現、大阪市阿倍野区）に神社を建てることになった。住吉大社の北方に位置する高台にあるこの地は、当時、閑静な別荘地として邸宅が立っていたが、所有者らが土地を寄進し、神社用の土地3492坪を獲得した。この地の近くに大名塚と呼ばれる塚がある。1701年に刊行された攝津地誌の『摂陽群談』



図5 阿部野神社

¹⁸ 和田（1935）62-70 ページ。

¹⁹ 『東京朝日新聞』1884年5月28日

²⁰ 『東京朝日新聞』1897年11月14日

²¹ 石塚（1909）30 ページ

²² 石塚（1909）6-7 ページ

(岡田溪志)に「大名塚、所伝北畠中納言顕家卿の古墳なりと云へり」という記述があり、『太平記』に「阿部野にて討死にし給えば」とあることから、大名塚が顕家の墓だと言われてきたのである²³。

楠木正行自害の地である四条畷には、1868年、住吉平田神社の神主・三牧文吾等が神社創建を願い出るが、時期尚早として認可されなかったが、1878年、大久保利通(1830-1878)揮毫による「贈従三位楠正行朝臣之墓」の碑が建立された【図6】。その後、有志者等が神社創立を懇請し続け、碑から東へ1.3kmの場所に四条畷神社が建立されることになった。1889年6月17日、大阪府知事・西村捨三(1843-1908)が提出した上申書には以下のように、楠木正行を祀ることが教育の上で重要であることが主張された。

戦死ノ地河内国四条畷ニ於テ墓碑建設爾後該地人民非常ニ感発追敬近況ニ至リテハ学校生徒等運動ニ講演ニ集会只管卿ガ忠節ニ欽慕シ大阪市街高等小学生徒モ亦数里ヲ遠シトセズ該墓畔ニテ兵式運動ヲ為スニ至レリ²⁴

『太平記』に記される湊川の戦いに赴く父親との別れ(桜井の別れ)や、足利尊氏から届けられた父親の首を見た正行が自害しようとした話、父親の悲願を叶えるため河内国を統治しながら戦力を蓄えた話などは、「忠孝両全」を示す道德教育の恰好の題材となった。やがて四条畷および桜井のエピソードは教科書に記載され、修学旅



図6 小楠公墓所

行等で訪れるべき場所として認識されるようになる。

国史教科書における楠公父子の記載の変化を分析した谷田(2019)によると、軍国主義化が進むにつれて楠木父子の記述が増えていったと指摘する。1904年から1909年の『小學日本歴史』では楠公父子を特別視する記載は確認できないが、1911年に南朝が正統と定められると、楠木正成は忠臣として称賛されるようになる。日本歴史が国史と改名した1921年以降、南北朝を扱う分量が増え、楠公父子が最も高く称揚された。楠木正成が湊川神社に祀られていること、楠木正行が四条畷神社に祀られていることが教科書に記載され、その時代と南北朝を結びつけられる。その後の『尋常小學国史』(1934-1939)および『小學国史』(1940-1942)では口語体になってわかりやすくなったという他に大きな変更箇所はないが、戦局が厳しくなった時期の『初等科国史』(1943-1945)では、吉野の桜と九段の桜が重なるような記述や南朝忠臣の霊と靖国の英霊が重なるような記載があり、全体的に悲壮感が漂っていると分析する²⁵。

湊川神社の創建や四条畷の大久保利通揮毫の碑の建立は、名和神社や結城神社、阿部野神社などの創建にも大きな影響を与えた。藤島神社の事例からは建立がかなり急速であったことが確認できるように、1870年代から90年代にかけて創建された南朝関連神社がその後、どのように研究および観光化と結びついていったかを整理していく。

第3節 古蹟の保護と顕彰

南朝の武将や後醍醐天皇を祀る神社は地元住民の働きかけによって次々に創建され、1930年代には全国(北海道、青森、秋田、京都、沖縄を除く)で166社に達した。その多くは楠木正成を祀る楠神社や湊川神社、新田義貞を祀る新田神社であった。1934年の「建武中興六百年」の際には「関係十五社」という表記も用いられるようになった²⁶。神社建設に限らず、地域の古蹟を保存・顕彰を目的とした民間団体は各地で誕生した。1879年、最初に設立された保見会は、明治期に衰退した日光の社寺を保存することを目的とした。こうした史跡の保存と顕彰を通した愛郷運動は盛んになり、京都保勝会(1881年)、好古会(1888年)、都農神社保存会(1890年)、真野宮保存立誠会(1894年)、小豆島寒霞溪保勝会(1898年)と続いた²⁷。

1899年、ナショナルな古蹟の保存および研究、顕彰団体として、帝国古蹟取調会が発足した。初代会長には、貴族院議員の九条道孝(1839-1906)が就任した。規約で

²⁵ 谷田(2019)70-82ページ

²⁶ 『建武中興六百年記念会事業報告』(1934)

²⁷ 西村(1993)178-179ページ

²³ 住吉常盤会(1928)414-417ページ

²⁴ 四条畷神社々務所(1938)2ページ

は古蹟を、①皇祖の神蹟、②皇宮の旧蹟、③皇族の陵・墓、④大臣以下名士の墳墓、⑤學術の研究に資すべき古物遺蹟、⑥古社旧寺、と定義した。古蹟に関わる写真や遺物、文書を収集し、保存すること、本部を東京に置き、支部を京都に置くこと、役員には総裁・顧問・会長・副会長・幹事・会計監督・常務員・評議員・協議員・学事顧問・取調員・編輯員を置くこと、調査員は会長の指揮の下、現地に赴き記録を取ることが定められた。さらに、「學術ノ研究ニ資スベキ個物遺跡ハ碑ヲ建テ其由緒ヲ標識シ或イハ之ヲ買収シテ壊敗ヲ防クモノトス」²⁸として、調査に基づいて碑の設置が推奨された。

1900年の『帝国古蹟調査会会報』第1号では湊川神社の碑が取り上げられた。

徳川光圀嘗て楠公忠死の蹟を取調べて摂津湊川の畔に標石を建つ、実に我帝国古蹟保存会顕彰の第一着手といふべき、此建碑ありてより、忠臣義士の朽骨再び光輝を放ちて、当時の功臣今や何れも官社に列せらる、加之、此建碑を去る百七十余年、こゝに明治の維新に遭ふ、これ豈に建碑之が導火線となりしに非ざるを知らんや、古蹟顕彰の国家百年に対する功蹟亦大なりと云ふべし²⁹。

また、楠木正行についてはその墓の所在に関する論考が掲載された。中田憲信(1835-1910)は、楠木正行の墓が往生院六萬寺であるとして、「贈従三位楠正行朝臣之墓」は招魂碑に該当すると主張した。

飯森山下なる南野は小楠公以下将士絶命の処にして忠魂の此に留る所碑を建て神社を設けて祭享の礼を厚ふせらる固より其所たり六萬寺は小楠公遺骸埋葬の所なれば至心敬を致し以て将来永く汚穢に混せしめざるの措置を為さるへからず³⁰。

学事顧問らは各地の古蹟を巡り、現地の様子を綴っている。田中義成(1860-1919)は奈良県賀名生村(現、奈良県五條市西吉野町)の北畠親房の墓や、上野国新田郡市井村の生品神社を訪問し、歴史的に重要な古蹟であるにも関わらず荒廃していることを嘆いている³¹。『会報』は1903年から『古蹟』と改名して月刊誌となるが、帝国古蹟取調会は日露戦争開戦に伴って活動を中止した。

帝国古蹟取調会の発足と同じ1899年、日本歴史地理研

究会(後、日本歴史地理学会と改名)が原秀四郎(1872-1913)、岡部精一(1868-1920)、喜田貞吉(1871-1939)などの10名によって設立された。多くが歴史学を学ぶ若手研究者であった。研究項目は、以下の4点である。すなわち、①古跡・旧都・社寺・陵墓・古城・古戦場・名所等、②地勢の変遷・河川・海岸・山腹等の変動、③古今の地理上の智識・地誌・紀行・地図等、④政治地理・国郡郷里領邑の境界・都市宿駅道路津済の変遷・人口の増減・産物の沿革・地理と文明との関係、である。日本歴史地理研究会は懇談会から始まり、1899年10月には『歴史地理』が創刊された。

『歴史地理』の創刊号において三上参次(1865-1939)は、東京では江戸時代の建物が次々と取り壊され、ほとんど当時の名残のない地域もあるが、「地方には尚其郷土を懐ひ其歴史を重んずるの念強き」³²として、郷土愛に基づく古蹟顕彰が過剰であると問題視する。「地方的感情」の悪例として大阪の高津宮の十分な研究がなされていないにも関わらず顕彰事業が進むことを以下のように批判する。

大阪市にして史蹟の真偽は第二として、事業上の便利に依り、幾多の疑点あるに関らず、経営に易き方を選びて假りに之に定めしと云はゞ吾人は固より此問題の資料乏しくして、根底まで解明し得るゝものに非ざるを知れば、寧其巧を称せんとす³³。

また、当時、北畠顕家の墓についても歴史学者の星野恒(1839-1917)は1903年、『歴史地理』にて「北畠顕家卿の戦没地と其墓」という論文を発表し、顕家の戦死地は和泉の石津であると主張した。北畠公園の墓は、1723年、大名塚と呼ばれていた墓に並河誠所が顕家の墓としたものであり、この地が顕家の墓だと言われてきた。この辺りは古墳が多く、豪族の墓を誤って顕家の墓と伝えられたと主張した。

摂津国東成郡阿部野を以て顕家卿戦没の処と為し、其地に大名塚と称する古塚を以て卿の墳墓に充て塚上に墓標を建て、明治以降新に其近傍に卿の堂祠を建設し、近日又右の古塚を修繕して大に之を彰表せんとするの企ある由に聞けり…徒に史上の事実を攪乱せんとするに至りては、決して等閑に付して傍観すべからず、因て顕家卿の戦没は和泉の石津にありて摂津の阿部野にあらざりし事実を詳にして、其真妄を明示すべし³⁴。

²⁸ 「帝国古蹟取調会規則」2-3 ページ

²⁹ 「湊川楠公碑について」59 ページ

³⁰ 中田(1901)43 ページ。『会報』第3号で往生院六萬寺は楠木正行の墓ではないとされた。

³¹ 田中(1903)34-36 ページ

³² 三上(1899)4 ページ

³³ 麻郷(1900)62 ページ

³⁴ 星野(1903)1 ページ

三上参次は繰り返し史実とは異なる場所が史跡として観光地化されること、殊更に俗化されることに警鐘を鳴らしている³⁵。齋藤（2015）は、民間の古蹟保存団体は地域の偉人を顕彰することに重点を置いていたのに対して、日本歴史地理研究会は通俗的な歴史観や民間の古蹟保存事業や記念祭の流行を批判したと指摘する³⁶。

日本地理歴史研究会は、一般向けの古戦場の案内書『歴史地理叢書古戦場』を1901年に創刊し、全国36カ所の古戦場を時代順に紹介した。「日本武尊東夷を征す」として最初に焼津が取り上げられ、以下、多賀城・胆沢城、衣河・鳥海・厨川の柵、金沢柵と続き、「豊臣氏滅亡す」の大阪城で終わる。古戦場の来歴を正確に理解することを促し、四条畷神社では以下のように検証が必要であると指摘する。

今四条畷神社は飯森山の西麓の高所に在りて、平野を一眸の間に集め、眺望爽快風景亦佳なりとす。正行の墳墓は神社の西九町、和田源秀の墓は東北五町にありとて、今皆碑石を建て、之を表せり。回面の墓は往生院にありなど雖、共に確かなるものならざる如し。猶一層の考證を要す³⁷。

1900年代初頭は、古蹟の保存や研究が進んだ時期でもあるが、1911年に南朝正統論が唱えられると、南朝史蹟のイデオロギー性が強まっていった。学術的には、明治維新後も南北朝並立説が唱えられていたため、喜田貞吉は国定教科書に北朝と南朝を並立して記述した責任を問われ、1911年、休職処分となった。三上参次は学術的には南北朝並立の立場であったが、政府が南朝を正統とするするならば、それに従うとした³⁸。

皇国史観はこの時期に普及し始めた修学旅行にも影響を与えた。江戸時代以来の伊勢参りは、皇室ゆかりの神社として修学旅行の定番となり、古戦場は日本の歴史と地理を学ぶ地と見なされた。20世紀初頭の修学旅行では、湊川神社や四条畷神社などは住吉神社や熱田神宮などの他の神社と比して各段に特別な場所ではなかったが、1930年代以降、楠木父子の物語が劇的に語られるようになり、楠木父子ゆかりの地を重視する記述が増えてゆく。次の節では修学旅行の展開と古戦場としての南朝史蹟の観光地化の関係を整理する。

第4節 修学旅行と史蹟めぐり

修学旅行の始まりは1888年とされる。「尋常師範学校

準則」において「修学旅行ハ定期ノ休業中ニ於テヶ月六十日以内トシ可成生徒常承食費以外ノ費用ヲ要セサルノ方法ニ依テ之ヲ施行スベシ」³⁹と定められた。これ以前より師範学校では徒歩による行軍のような団体活動が行われていたが、体操や軍事教練が体操科に加わると、修学旅行から行軍の要素が排除され、博覧会見学や名所旧跡の訪問など、教育的な要素が強まっていった⁴⁰。1901年には朝日新聞社主催の満州韓国への修学旅行が企画され、全国から集まった多くの学生が門司や宇品から陸軍の用意した船に乗って大陸へ渡っていった。大陸旅行の様子は連日、新聞に掲載され、新聞は今日的な旅行ガイドブックのような役割を果たした⁴¹。

地理歴史研究会の修学旅行案内は、神社仏閣や城址、古戦場に加えて、藤島神社や菊池神社などの別格官幣社を記載した。例えば福井では「杣山、黒丸、等の地方は延元のむかし新田義貞、義助、義顕等の兄弟父子が賊軍と久しく戦争したりし古跡にして武生町の如きは当時府中と称し足利高経の拠りて義貞と雄を決せし所なり福井市の北方西藤島村大字牧が島に藤島神社あり義貞の令を祀る其北十五丁同大字福萬は実に公の戦死の地なり」⁴²と地理的および歴史的正確さを重視し、藤島神社と新田塚を区別している。

また、1901年、修学旅行の葉として刊行された『日本廻遊修学旅行』は、関ヶ原や桶狭間、長久手などの古戦場を紹介した。鎌倉宮や湊川神社、藤島神社、阿部野神社、四条畷神社などが記されるが、井伊谷宮や八代宮、菊池神社については記載がない。阿部野神社と四条畷神社の地理的な連続性は、「大阪より南行したる北畠顕家が戦没したる阿部野の西を過ぎ大和川を渡れば堺市に至る往昔外国との互市場たりし所にして鉄器鍛通を産す大阪より東行すれば四条畷の古戦場あり正行が戦死の琵琶歌に…」⁴³という記述から確認できる。

実際の修学旅行の記録としては、秋田師範学校が1903年に行ったものが挙げられる。秋田師範学校の生徒51名および教員3名は、1903年4月18日に土崎港を出港し、北陸を回って敦賀から琵琶湖、京都、神戸、大阪、奈良、宇治山田、名古屋、鎌倉、東京、日光、仙台、横手を回り、5月15日に帰還した。金沢を経て福井を訪れた一行は新田義貞死去の地に赴き、次のように記した。

市を流る、足羽川の辺に古城址の聳ゆるを見ては、
転た延喜の昔を想起して、彼の新田義貞が孤軍を以

³⁹ アジア歴史資料センター A15111594400

⁴⁰ 山本（2021）131-132 ページ

⁴¹ 有山（2002）54-57 ページ

⁴² 地理歴史研究会（1902）282 ページ

⁴³ 谷口（1901）97-98 ページ

³⁵ 三上（1917）92 ページ

³⁶ 齋藤（2015）71 ページ

³⁷ 日本歴史地理研究会（1901）86 ページ

³⁸ 生駒（2020）312-318 ページ

て大軍に当り、遂に白羽一矢空しく此足羽河畔の露と消えしに末路の哀れなるに咽び、我等が今馳せ居る此土は皆これ忠臣義士の血を流したる所かと思へば、何となく物悲しく雨さへ尚やまで、天地陰々いと心細げなり…⁴⁴。

湊川神社については、楠木正成の偉業を以下のように讃えている。

古来名将勇士多しと雖も、其至誠、君に忠し、至仁、民を撫し、難に当り死に瀕して断固其色を更めず、終始一貫其畢生を屑くせしもの、今だ楠公の如きを見ず、菊水の香は千載の末其芳益々高く、貴賤老幼殿下に拝伏し涙を以て其偉勳を追称し、其鴻徳を慕ふ…⁴⁵

湊川神社周辺に広がる歓楽街の賑わいを嘆き、「若し楠公にして霊あらば…嗚呼忠臣楠公之墓と云う一孤碑のみありし時代や、恋しう思ひ給ふらん」⁴⁶と述べている。その後、一行は大阪城を訪問する。大阪城の建物は鳥羽伏見の戦いに際して焼失し、当時はわずかに門と櫓が残る程度であり、その様子を「感慨甚だ切なりき」⁴⁷と残している。名古屋には英雄が多かったことや、平泉では『奥の細道』の道筋をなぞるように古蹟を巡る様子が記される。

1918年の富山県立高岡中学の修学旅行を引率した教員は、生徒に新田塚（燈明寺畷）にて礼拝させた様子を以下のように記録した。

公戦死された地点には、疎林に囲まれし小祠がありこの中に越前侯が建てし「新田義貞戦死此所」（其側に歴應元年閏七月二日と書せり）と記した石碑がある。そして其の附近は全部田や畑であつた。先づ生徒一同を祠前に整列させて体拝せしめ、公の精忠遺烈を述べ…⁴⁸。

1918年刊行の『近畿名所一日の遊覧』では、以下のように伊勢や吉野、伏見などの神社や天皇陵への参拝方法が具体的に記される。

四条畷神社は小楠公の霊廟なり、父公正成の意を重いで二代の格勳を尽せし、南朝の忠臣楠正行を祀る処、英霊遠く去つて青苔歳を重ねることも深しと雖

も、楠の香りは長へに伝えて愈よ芳ばし。

汽車は片町線により四条畷駅に下車すべし、片町線は大阪城の東方、片町にありて城東線京橋駅にて接続す、京橋駅は湊町より六里三、大阪駅より二里六、四条畷駅は京橋駅より七里六、片町よりは八里二、城東線大阪、湊町間の各駅より左の如き特定割引乗車券を発売し、尚片道乗車券に対しても特定割引の制定あり⁴⁹。

修学旅行は、歴史を学ぶことが主軸であり、特にその地を拝するような行為は確認できないが、南朝史蹟では「忠臣」に敬意を表する記述や「感激」「涙」「恥」といった感情的な単語が増えてゆく。

1924年刊行の日本最初の旅行雑誌『旅』⁵⁰では、1934年、「建武中興六百年（関係十五社巡拝に就て）」を掲載し、1937年から1938年には「別格官幣社詣うで」として小御門神社や結城神社、藤島神社、霊山神社などの別格官幣社を紹介した。1937年12月号『旅』では「楠公父子の遺跡を訪ねて」というグラビア特集において、大楠公の誕生地、婦人の亀鑑大楠公夫人、小楠公と四条畷という項目が設けられた【図7】。関連する場所の写真は、これまで教科書において文字や挿絵で示されてきた吉野の風景や千早城址、赤坂城址などを写実的に示すだけでなく、「楠公誕生地」の碑や首塚のある観心寺に参拝する人々、笠置山に登る家族の姿を示し、読者に人々が訪れるべき場所やその場における望ましい態度を明確に見せた。『旅』を刊行する日本旅行社は、茶代の廃止などの宿泊施設の合理化や団体旅行の推進、旅行者のモラルの改善だけではなく、団体旅行を通して国民の創出を目指



図7 「楠公父子尽忠の跡をたづねて」『旅』14 (11)

⁴⁴ 港多記（1903）29 ページ

⁴⁵ 港多記（1903）56 ページ

⁴⁶ 港多記（1903）56-57 ページ

⁴⁷ 港多記（1903）62 ページ

⁴⁸ 秋山（1923）14 ページ

⁴⁹ 野田（1918）169 ページ

⁵⁰ 1921年に設立された日本旅行文化会は1924年に日本旅行文化協会となり、日本最初の観光雑誌『旅』を刊行する。1926年に日本旅行協会と改名する。



図8 「神戸」川瀬三郎書店

したのである⁵¹。

1934年から1935年には、「建武中興六百年」を記念した様々な行事が行われた。例えば、大阪放送局は1935年5月22日から4日間にわたって「大楠公史蹟巡り」を放送した。第一日は「楠公誕生地」の赤阪村、第二日は千早城、第三日は楠妣庵、第四日は湊川神社においてそれぞれ講師が講演し、ラジオで中継された⁵²。1939年9月下旬には、大日本青年団と朝日新聞の共催によって、「建武中興社旗継走大会」が実施された。これは南朝関連の15社をつなぐリレーで、ゴールは吉野神宮であった。吉野から最も遠い熊本の八代宮および菊池神社、福島県の霊山神社からの走者が9月22日に出発した。9月25日に霊山神社、小御門神社、鎌倉宮の走者が小田原に到着し、9月28日、井伊谷宮を加えた一行が熱田神宮に至る。同日、西からの八代宮、菊池神社は岡山に入る。藤島神社の走者は敦賀へ、名和神社の走者は姫路に到着した。9月29日、名和神社と菊池神社、八代宮の走者が合流し、9月30日、全走者が吉水神社に至る。10月1日、走者らは吉野神宮50年大祭および後醍醐天皇600年御式年祭に参列した。合計9日間で、のべ2万人の青年団員が参加した⁵³。

この時期、修学旅行で一般的になっていった南朝史蹟

が、より神聖な場所として仕切り直されていく様子が『楠氏三代の史蹟めぐり：建武中興六百年記念』から確認できる。この書籍の冒頭では、楠木正成の妻・久子が余生を過ごしたとされる楠妣庵について以下のように記されている。

修学旅行等により楠氏史蹟めぐり御催のむきは楠妣庵に旅行の根拠を置き晝は遺蹟を訪ねて忠魂になみだをさ、げ夜は静に大楠公夫人のおもかげを偲びつ、感謝のねむりに就くという事に改めて従来の旅館宿泊の悪弊を此際一切清算して頂きたい⁵⁴。

吉田初三郎が制作した神戸観光のリーフレットには「桜井の別れ」の絵が掲載されている【図8】⁵⁵。この場には、大阪府知事・渡辺昇（1838-1913）による「楠公父子訣児之處」の碑があり、その裏面には英国公使ハリー・パークス（Harry Smith Parkes）が「1336年の湊川の戦いの前にこの場所で息子と別れた忠臣楠木正成の忠義に捧げる」と記した文字が刻まれている。パークスの小さな英文は碑陰であるにも関わらず、陸軍少将・伊豆凡夫（1864-1944）は「国辱」であるとして、以下のように述べた。

⁵¹ 森（2010）47 ページ

⁵² 第一日、講師：魚澄惣五郎（大阪女子専門学校教授）「大楠公誕生地に立ちて往時を偲ぶ」、第二日、講師：藤田精一（元陸軍士官学校教官）「千早城址を中心とする楠公古戦場」、第三日、講師：大佛次郎（作家）「家庭の大楠公」、第四日、講師：宮地直一（東京帝国大学講師）。「大楠公史蹟巡り」『東京朝日新聞』（1935年5月22日、23日、24日、25日）

⁵³ 1区は4 km、全524区、正奉仕者2名・副奉仕者1名・先駆者1名・随行者20名以上であった。

⁵⁴ 『楠氏三代の史蹟めぐり：建武中興六百年記念』1934年

⁵⁵ 1884年、京都に生まれた吉田初三郎は関西美術院で洋画家の鹿子木孟郎に学び、商業美術の才能を開花させる。1913年、初三郎が最初に描いた鳥瞰図「京都電車案御内図」が皇太子（後の昭和天皇）の目に留まり、鳥瞰図を弟子たちと作成するようになる。1921年には鉄道省から鉄道開通50周年記念としてリニューアルするガイドブック『鉄道旅行案内』の挿絵と装幀を依頼される。



図9 楠公父子訣別之碑

嗚呼古今無双の大忠臣大楠公の遺蹟が茫々として荒れて居るばかりではありません、其の標示の碑が人もあらうに外国の公使に依りて建設され苟も我が国民が其の儘に之を打ち捨て、居たと云ふことは、実に大なる国辱ではないでせうか是れは是非共此一小碑を蹴下するやうな一大碑石を建てねばならぬと其の時日本国民としての責任を考へました⁵⁶。

1913年、この碑を見下ろすような形で乃木希典揮毫の「楠公父子訣別之碑」の碑が建立された【図9】。この地が本当に楠木親子の別れの場所であるかという疑問も寄せられていたが、伊豆は帝国大学資料編纂係に確認し、この場所であると断定できるとして碑の建立に至ったという⁵⁷。この時期、満州戦跡保存会が発足し日露戦争の激戦地となった旅順の二〇三高地に乃木希典揮毫の爾霊山の碑が建立された。戦跡を保存する理由として、永遠に忠烈を顕彰し、世界史に貢献することが掲げられ、1916年に水師営会見所の碑、1918年に乃木保典戦死の碑と東鷄冠山北堡壘の碑が建立された。1930年代に入ると、これらの記念碑を結ぶルートが確立し、多くの日本人が旅順観光へ出かけた⁵⁸。

1934年以降に「建武中興」を題した書籍を見ると、「涙」「恥」「感激」という言葉が頻繁に使用されていることが確認できる。1901年刊行の『歴史地理叢書古戦場』では各古戦場の由来と記念建造物について淡々と述べられているだけであるが、1930年代になると、古戦場の説明に

は感情を掻き立てるような言葉が増えてゆく。自己犠牲の叙述と古戦場の神社や古蹟などの視覚的な装置およびそこで開催されるイベントが密接に結びつき、その場を訪れることが国民の喫緊の義務であるかのような錯覚を抱かせる効果がもたらしたと推測される。このようなナショナリズムについて、林志弦（2022）は以下のように述べる。

東アジアにおいて戦争と変乱で非業の死を遂げた人の霊魂が大儀に殉じた戦死者へと昇華されるのは、近代国家による国民儀礼の導入以降であった。…「殉教」の概念は、来世での復活を保証する終末論的な信仰と結びつき、「犠牲こそ勝利につながる」という確信を生んだ⁵⁹。

戦場観光と歴史教育の結びつきは近代国家ではしばしば起こる現象である。Chylińska (2020) はラツワヴィツェのパノラマや記念碑が戦場の景観を再構築した事例からポーランドにおけるラツワヴィツェ戦い（1893-1894）がナショナル・アイデンティティを再構築したことを論じている。ある戦争はナショナルな歴史の語りから除外される一方で、ある戦争はナショナルな神話となり、学校のカリキュラムに取り入れられナショナル・アイデンティティや集合的記憶を再構築する道具として用いられると指摘する⁶⁰。

湊川神社では軍事的なイベントが開催され、ナショナル・アイデンティティを作り出す場となった。日清戦争期には、神戸港に近い湊川神社は出征部隊の休憩所となった。「出征に当って御神前に額いで一死奉公を誓ひ私かにみづから第二の楠公たらんことを心に期して戦場に赴いた将士の数は甚だ多きに達した」⁶¹という。同社境内は日清戦争後、祝勝会の会場となり、1895年2月16日から開催された威海衛陥落祝捷会には4000名以上の市民が集まった。日露戦争期も同様で1904年3月7日、650名の出征部隊による最初の湊川神社への正式参拝があり、続いて48,000名以上が参拝した。戦後の大捷報会も盛大に行われた。特に戦利品として東郷平八郎より寄贈された軍艦三笠の帆柱の破片と、陸軍省より寄贈されたロシア軍の23cmカノン砲は多くの市民の関心を引き付けた興味を寄せた⁶²。さらに、1937年の日中戦争全面化以降、湊川神社を訪問する人の数が増え、その様子は日清日露戦争期を彷彿とさせるものであったという⁶³。

⁵⁹ 林志弦（2022）46 ページ

⁶⁰ Chylińska (2020) p.789

⁶¹ 藤巻（1939）223 ページ

⁶² 藤巻（1939）232-233 ページ

⁶³ 藤巻（1939）325 ページ

⁵⁶ 伊豆（1936）143 ページ

⁵⁷ 伊豆（1936）146 ページ

⁵⁸ 高山（2012）

南北朝時代の古戦場の観光化は、塚や碑の発見および再評価に始まり、神社建立と戦争の叙述の確立を経て、修学旅行などの目的地として取り入れられる形で進んだ。1920年代以降の交通網の整備と大衆雑誌の普及によって南朝史蹟は、訪れるべき場所と認識されるようになった。1930年代、楠木父子や新田義貞の自己犠牲の叙述は教科書だけではなく、他のメディアにも登場し、1934年以降の「建武中興六百年」の一連のイベントでは南朝史蹟は皇国史観を可視化する装置となった。戦後の非軍国主義化の中で、こうしたイデオロギーは薄まり、観光地としての南朝史蹟の意義を喪失させた。かつて主要な駅と神社を結んでいた鉄道（結城神社と新松阪を結ぶ伊勢電気鉄道、井伊谷宮と浜松駅を結ぶ遠州鉄道奥山線、菊池神社と上熊本駅を結ぶ熊本電気鉄道、金崎宮と敦賀駅を結ぶ敦賀港線）が相次いで廃線となった。また、2023年12月の近鉄富田林駅から千早城や赤阪城へ向かう金剛バスの路線の廃止は、大きなニュースとして取り上げられた⁶⁴。参拝者が減少した古戦場としての南朝史蹟とは反対に、近年になって資料館や銅像が建設された事例もある。最後にこうした事例に触れて、本稿を終わらせたい。

おわりに

南朝史蹟に神社や石碑が建立された一方で、関ヶ原や桶狭間、長久手の3か所は、1930年代になってようやく国指定史跡の古戦場となった。国指定史跡の碑は建立されたが、歴史資料館のような建物は設置されなかった。長久手には1985年に長久手市郷土資料室が、関ヶ原には2020年に岐阜関ヶ原古戦場記念館がそれぞれ建設された。愛知県豊明市の桶狭間には桶狭間古碑（1816年設置）があったことから国指定の史跡となったが、近年では名古屋市長が今川義元戦死の地とされ、2010年に桶狭間古戦場公園として整備された。こちらにはNPO法人桶狭間古戦場保存会が運営する観光案内所が設置され、ボランティアガイドによる古戦場ツアーが行われている。また、岐阜関ヶ原古戦場記念館でもボランティアが史蹟の案内やイベントの運営などを実施している。

このように、近年では古戦場は地域活性化のための観光資源と見なされ、地方自治体や地元のボランティアによって支えられている。さらに、有志らが広場や公園などに武将の銅像を設置することもある。例えば、東京都府中市の分倍河原駅前には1988年、新田義貞像が設置され、熊本県菊池市には1992年、菊池武光像が設置された【図10】。菊池武光像の碑文には、「菊池の地は十数年余り九州の政治文化の中軸となる」と記され、新田義貞像



図10 菊池武光像

の碑文には「市民の郷土史への理解を深めるとともにこれを後世に伝えるためこの分倍河原合戦にゆかりのモニュメントを制作しこの地に設置するものである」と記される。南朝の「忠臣」という側面よりも地域の偉人という側面を強調することで、21世紀における地域の観光資源となりうるのである。

参考文献（漢字音読み）

- 秋山吉次郎（1923）、「新田左中將戦死の地と藤島神社」『上毛及上毛人』74、13-15 ページ
- 山輝雄（2002）、『海外観光旅行の誕生』吉川弘文堂
- 生駒哲郎（2022）、「戦前の南北朝時代研究と皇国史観」呉座勇一（編）『南朝研究の最前線：ここまでわかった「建武政権」から後南朝まで』朝日文庫、311-332 ページ
- 石塚豪雄編（1909）、『金崎宮参拝案内記』金崎宮社務所
- 井出明（2018）、『ダークツーリズム：悲しみの記憶を巡る旅』幻冬舎新書
- 伊豆凡夫（1936）、「大楠公桜井駅趾建碑に就いて」近藤保雄編『護国の神大楠公：大楠公六百祭記念』精神運動社
- 大橋義三（1904）、「楠公の首塚」『古蹟』3（4）、17-18 ページ
- 岡田蔵造（1934）、「建武中興六百年（関係十五社巡拝に就て）『旅』（1）、10-14 ページ
- 官幣中社鎌倉宮社務所編（1930）、『護良親王と鎌倉宮』官幣中社鎌倉宮社務所
- 小林健三（1937）、『建武中興と金崎』金崎宮御祭神六百年大祭奉賛会
- 齋藤清衛（1937）、「南朝の史蹟を訪ねて」『旅』14（12）、44-47 ページ
- 齋藤智志（2015）、『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』法政大学出版局
- 芝野懐風（1937）、「別格官幣社まうで」『旅』14（11）、18

⁶⁴ 「金剛バス廃止：金剛バス運行最終日」『毎日新聞』（2023年12月21日）

芝野懐風 (1938)、「別格官幣社めぐり」『旅』15 (2)、82
-83 ページ
四条畷神社々務所 (1938)、『別格官幣社四条畷神社社誌』
四条畷神社々務所
住吉常盤会編 (1928)、『住吉村誌』住吉常盤会
高野信治 (2022)、『神になった武士：平将門から西郷隆
盛まで』吉川弘文堂
高山陽子 (2012)、「聖地の記憶－旅順の事例から」『亜細
亜大学国際関係紀要』21、137-166 ページ
田中義成 (1903)、「古蹟巡覧小記 (一)」『古蹟』2 (2)、
34-37 ページ
谷口流鶯 (1901)、『日本廻遊修学旅行』文陽堂
谷田博幸 (2019)、『国家はいかに「楠木正成」を作った
のか』河出書房新社
地理歴史研究会編 (1902)、『日本全国巡遊学生遠足修学
旅行案内』田中宋栄堂
中田憲信・多田好問・薄井龍之 (1900)、「河内国六萬寺
小楠公墳墓の覈査」『帝国古蹟取調会会報』1、15-29
ページ
中田憲信 (1902)、「小楠公墳墓調査第二」『帝国古蹟取調
会会報』2、38-43 ページ
西村幸夫 (1993)、「「史蹟」保存の理念的枠組みの成立
「歴史的環境」概念の生成史」『日本建築学会計画系論
文報告集』452、177-186 ページ
日本歴史地理研究会編 (1901)、『歴史地理叢書古戦場』
六盟館
野田彩霞 (1918)、『近畿名所一日の遊覧』野田文六
羽賀祥二 (1998)、『史蹟論：19 世紀日本の地域社会と歴
史意識』名古屋大学出版会
藤巻正之 (1939)、『湊川神社六十年史 本編』湊川神社
星野恒 (1903)、「北畠顕家卿の戦没地とその墓」『歴史地
理』5 (8)、701-708 ページ
麻郷 (小林庄次郎) (1900)、「史跡顕彰に先たつ研究」『歴
史地理』2 (2)、148-150 ページ
三上参次 (1899)「東京市の史蹟及び史的物件の保存に就
て」『歴史地理』1 (3)、73-76 ページ
三上参次 (1917)、「史蹟保存と愛知縣」『史蹟名勝天然紀
念物保存協会報告書第 5 回報告』73-99 ページ
室井康成 (2022)、『日本の戦死塚：首塚・胴塚・千人塚
(増補版)』角川ソフィア文庫
森正人 (2010)、『昭和旅行誌：雑誌『旅』を読む』中央
公論社
山本志乃 (2021)、『団体旅行の文化史：旅の大衆化とそ
の系譜』創元社
林志弦 (澤田克己 (2022))、『犠牲者意識ナショナルリズ
ム：国境を超える「記憶」の戦争』東洋経済新報社
和田恒彦編 (1935)、『大楠公：大楠公六百年祭銅像建設

Beech, John (2009) “‘Genocide Tourism,’” in Sharpley,
Richard and Philip R. Stone eds., (2009), *The Darker
Side of Travel: The Theory and Practice of Dark
Tourism*, Channel View Publications, pp.207-223.
Brian, Avital and Dorina Maria Buda (2018), “Unravel-
ling Fear of Death Motives in Dark Tourism,” in Phil-
ip R. Stone, Rudi Hartmann, Tony Seaton, Richard
Sharpley and Leanne White eds., *Palgrave Handbook
of Dark Tourism Studies*, Palgrave Macmillan, pp.
811-839.
Chen, Chien-Min and Tsung-Hsien Tsai (2021), “Tourist
Motivations in Relation to a Battlefield: A Case Study
of Kinmen,” in Alan A. Lew ed., *Tourism Places in
Asia: Destinations, Stakeholders and Consumption*,
Routledge, pp.78-101.
Chylińska, Dagmara (2020), “‘Nameless Landscape’-
What Can Be Seen and Understood on a Battle-
fields?” in *Tourism Geographies*, 22(4-5), pp.787-812.
Dawson, Amando, Sinéad O’Leary and Noello O’Connor
(2022), “Holocaust Tourism: Education or Exploita-
tion?” in *Tourism & Heritage Journal*, 4, pp.37-52.
Karki, Neeru (2019), “Dark Tourism: Understanding the
Concept and Recognizing the Values,” in *Journal of
APF Command and Staff College*, 2(1), pp.42-59.
Lennon, John and Malcolm Foley (2001), *Dark Tourism:
the Attraction of Death and Disaster*, South-Western
Cengage Learning.
Llyod, David W. (1998), *Battlefield Tourism: Pilgrimage
and the Commemoration of the Great War in Britain,
Australia and Canada, 1919-1939*, Berg Publishers.
Mandelartz, Pascal and Tony Johnson (2016), *Thana-
tourism: Case Studies in Travel to the Dark Side*,
Goodfellow Publishers Ltd.
McDonald, Kate (2019), “War, Firsthand, at a Distance:
Battlefield Tourism and Conflicts of Memory in the
Multiethnic Japanese Empire,” in *Japan Review*, 33,
pp.57-85.
Migel, Angel, Madurga Garcia and Mendez Grillo (2023),
“Battlefield Tourism: Exploring the Successful Mar-
riage of History and Unforgettable Experience: A
Systematic Review,” in *Tourism Hospitalitys*, 2023(4),
pp.307-320.
Milles, William F.S. (2002), “Auschwitz: Museum Inter-
pretation and Dark Tourism,” in *Annals of Tourism
Research*, 29(4), pp.1175-1187.
Piekarz, Mark (2007), “It’s Just a Bloody Field! Ap-
proaches, Opportunities and Dilemmas of Interpretat-

- ing English Battlefields,” in Chris Ryan ed., *Battlefield Tourism: History, Place and Interpretations*, Elsevier, pp.29-47.
- Phuong M. NGO and Huong T. Bui (2019), “Contested Interpretation of Vietnam War Heritage: Tour Guides’ Mediating Roles,” in *Journal of Tourism & Adventure*, 2(1), pp.61-84.
- Ryan, Chris (2007), “Forts Sumter and Moultrie: Summer Cruise into a Catalyst for War,” in Chris Ryan ed., *Battlefield Tourism: History, Place and Interpretation*, Elsevier, pp.235-247.
- Seaton, A.V. (1999), “War and Thanatourism: Waterloo 1815-1914,” in *Annals of Tourism Research*, 26(1), pp. 30-158.
- Sharpley, Richard and Philip R. Stone (2009), *The Darker Side of Travel: The Theory and Practice of Dark Tourism*, Channel View Publications.
- Slade, Peter (2003), “Gallipoli Thanatourism: the Meaning of ANZAC,” in *Annals of Tourism Research*, 30(4), pp.779-794.
- Strange, Carolyn and Michael Kempa (2003), “Shade of Dark Tourism: Alcatraz and Robben Island,” in *Annals of Tourism Research*, 30(2), pp.386-405.

新聞・雑誌

- 「新田義会」『東京朝日新聞』1884年5月28日
- 「藤島神社移転の儀と土民の請願書」『東京朝日新聞』1897年11月14日
- 「藤島神社の変遷」『東京朝日新聞』1899年10月8日
- 「大楠公史蹟巡り」『東京朝日新聞』（1935年5月22日、23日、24日、25日）
- 「踏査記事 別格官幣社詣うで 顕家公の霊山神社に詣で、」『旅』14(11)、1937年、8-11ページ
- 「特輯旅のグラフ 第一特輯グラヴィア 楠木父子尽忠の跡をたづねて」『旅』14(12)、1937年
- 「金剛バス廃止：金剛バス運行最終日」『毎日新聞』（2023年12月21日）

その他

- 港多記編（1903）、『第三回修学旅行記』
- 神戸市観光課（1942）、『神戸史蹟めぐり』
- 吉田初三郎（1930）、「神戸」川瀬三郎書店（国際日本文化研究センター 吉田初三郎鳥瞰図データベース）
<https://iif.nichibun.ac.jp/YSD/>（2024年9月9日最終アクセス）
- 吉野神宮奉賛会編（1939）、『吉野神宮誌』